

*Absalom, Absalom!*におけるFaulknerの語りの技法(Ⅳ) Faulkner's Narrative Technique in *Absalom, Absalom!* (Ⅳ)

重 迫 和 美

Kazumi SHIGESAKO

The purpose of this series of papers is to clarify Faulkner's unique narrative technique in *Absalom, Absalom!*. The uniqueness of Faulkner's technique lies in his use of three devices which seem to be inconsistent with each other: ①to make the readers identify themselves with Quentin and appreciate the Sutpens' drama; ②to highlight the difference between the readers' and Quentin's information about the Sutpens' secret and make the readers try to solve the mystery on their own; and ③to make the readers have a full view of the drama, a play within a play, where the Sutpens' and the narrators' (including Quentin's) dramas are enacted at the same time. I have so far examined Chapters I, II and III. The task in this paper, then, is to examine Chapter IV.

In this paper I examine information about the Sutpens' secret given by Mr. Compson to the readers. I then classify each of the information events into three types according to their degree of truth value as estimated by a comparison of Mr. Compson's information with that obtained from various other, seemingly reliable, sources in the book.

Faulknerの*Absalom, Absalom!*は、読者を特異な読書体験に誘う。¹ 私の考えでは、この特異性は、①読者をQuentinと同一化させる一方で、②Quentinと読者の持つ情報量に差を作り、さらに③Quentinをも相対化する視点から作品を鑑賞させるような、一見矛盾する作用を同時に生じさせる複合的な仕組みを成り立たせている語りの技法によって生まれている。このFaulknerの語りの技法を明らかにするため、私はこれまで、物語言説をvoice, perspectiveという2つの観点から分析し、その解明を試みてきた。本稿では、既に取り上げた第1章、第2章、第3章に続き、第4章を検討する。²

本稿の大部分は、この章の主な語り手、Mr. Compsonによって読者に与えられるSutpen家の秘密に関する情報の内容の検討と、それぞれの情報を信頼度によって分類する作業に当てられている。まず、第4章で、どのような情報が、Mr. Compsonによって与えられているかを見ていく。次に、その情報に対して読者が持つ信頼の度合いによって、A. 事実として与えられているもの、B. Mr. Compsonの推測として与えられているもの、C. Mr. Compsonには理解できないものとして与えられているもの、の3つのタイプに分ける。どの情報が、どのグループに属するかを確認した後で、読者がMr. Compsonによって与えられた情報とQuentinの持っている情報とを比較検討する。

1

第4章は、BonとJudithとの結婚をSutpenが禁じた1860年のクリスマス前夜から、HenryがBonを射殺した1865年くらいまでの出来事を中心に描いている。主な語り手はExternal narrator³とMr. Compsonである。冒頭の70頁から71頁⁴の前半部分と、102頁から105頁の他の部分は、External

narrator の語りで、その他のほとんどの部分は Mr. Compson の語りになっている。Quentin に当てられた台詞は、71頁の父に対する返事、“Maybe I can read it all right.” だけである。

読者と Quentin との心理的距離⁵について見てみよう。次に引用するのは、第4章の冒頭部分である。

It was still not dark enough for Quentin to start, not yet dark enough to suit Miss Coldfield at least, even discounting the twelve miles out there and the twelve miles back. Quentin knew that. He could almost see her, waiting in one of the dark airless rooms in the little grim house's impregnable solitude. She would have no light burning because she would be out of the house soon.... She would be wearing already the black bonnet with jet sequins; he knew that: and a shawl, sitting there in the augmenting and defunctive twilight;... and a parasol, an umbrella too, he thought, thinking how she would be impervious to weather and season.... Yes, she would have the umbrella. She would emerge with it when he called for her and carry it invincibly....(70)

この部分の voice は、External narrator のものである。第1文では、時間と場面が設定されていて、第4章の物語は第3章に続いていることがわかる。第2文以降の Quentin について用いられている動詞 “knew”, “see”, “thought”, “thinking”, はいずれも Quentin 自身にしか知り得ない彼の内面を伝えるものであり、また Rosa の行動を描いている文の助動詞 “would” は、その描写が、Quentin の想像上の視覚的映像であることを示していて、これらの部分が Quentin の perspective から語られていることがわかる。しかも、冒頭の External narrator の voice による物語言説の大部分も Quentin の perspective から語られている。第4章全体を通して見ても、External narrator が、focal character として使うのは、Quentin だけである。第3章は、ほとんど Mr. Compson の語りで Quentin 自身の voice による物語言説も、External narrator が Quentin の perspective から語る物語言説もないため、Quentin と読者との心理的距離は大きくなっていたが、第4章ではこのように、冒頭から External narrator が Quentin の perspective から語っているため Quentin と読者との心理的距離は小さくなっていると考えられる。

71頁の後半から、102頁にかけての Mr. Compson の voice による物語言説が終わると、再び External narrator の voice による描写が始まる。

(It seemed to Quentin that he could actually see them [Bon and Henry], facing one another at the gate.... They faced one another on the two gaunt horses.... the one with the tarnished braid of an officer, the other plain of cuff, the pistol lying yet across the saddle bow unaimed, the two faces calm, the voices not even raised: *Don't you pass the shadow of this post, this branch, Charles; and I am going to pass it, Henry*) (105-106)

ここでは、“he could actually see” という表現でこれが Quentin の想像であることが分かる。特に “see” という動詞は、これが Quentin の視覚的映像であることを示している。第4章の最後の部分もまた、External narrator は Quentin の perspective から語っているのである。また、この部分では Bon と Henry の台詞が直接話法で書かれている。イタリックスになっている台詞の部分に付けられた “the voices not even raised” という注釈は、これらの台詞が Quentin の想像を External narrator が語ったものであることを示していて、この場面では、情景だけでなく音声さえも Quentin の perspective から描かれていることになる。

物語構造上の距離⁶はどうだろうか。第4章では、External narratorに配分された語りは、全体の13分の1程で、残りはほとんどがMr. Compsonの語りになっている。Quentinは、設定上は父の話の聞き手となっていて、彼自身が口を挟むこともほとんどなく聞き手に徹している。一方読者は、Mr. Compsonの台詞を直接聞く位置にあると考えることができる。なぜなら、Mr. Compsonの語りの部分では、External narratorが姿を出すことがないからだ。ということは、読者も、QuentinもMr. Compsonの話す物語の聞き手として、同じ立場にあると考えることができ、物語構造上、両者の距離は、小さくなっていると言える。

このように、第4章では、External narratorが語る部分では、Quentinのperspectiveによる物語言説が唯一支配的である。読者にとっては、Quentinは、External narratorによって、唯一視点を共有するcharacterとして描かれ、結果として読者とQuentinとの心理的距離は小さくなっていると考えられる。また、Quentinと読者は、Mr. Compsonの語る物語の聞き手として、立場が同じであると考えられることから、物語構造上の距離についても、小さくなっていると言え、第4章では全体として、External narratorが読者をQuentinと同一化させるように働いていると考えられる。

2

次に、読者に与えられる情報についてみていく。第4章では、External narratorは、読者に情報を提供する役を果たさず、読者はMr. Compsonのみから情報を提供される。以下に示すのは、Mr. Compsonによって与えられるSutpen家の秘密に関する情報を語られる順番にまとめたものである。

- I—1 1860年のクリスマス前夜に起こったSutpenとHenryとの言い争い。(SutpenがHenryにBonの情婦と子供について真実を語る。)
- 2 ただし何を言ったのか、全ての内容については正確なことはわからない。
- 3 クリスマスに起こったことがSutpen家の悲劇を招いた。
- 4 SutpenがHenryに言ったことは、JudithとBonの結婚を妨げる理由として十分なものであった。
- II—1 JudithはBonの持っているmetal caseの中の写真が自分ではなく、彼の情婦と息子を写したものであったことを発見した。(Rosaの情報の訂正)
- 2 しかも、Bonの情婦はoctoroon(黒人の血を8分の1有する黒白混血の人)であった。
- III—1 Bonには秘密がある。
- 2 Sutpenは、Bonを見るとすぐにNew Orleansへ秘密を探るために行った。
- 3 Sutpenは、New OrleansでBonの秘密を知った。
- 4 Henryは、New OrleansでBonの秘密を知った。
- IV—1 Bonが重婚を企んでいたこと。SutpenがBonとJudithの結婚を禁じ、HenryがBonを射殺した原因は、Bonの重婚であった。
- 2 重婚では殺人の動機としての説得力に欠ける。(そこで原因は、Judithがoctoroonの女性が一員であるBonのハーレムの中の一人になることであった、とMr. Compsonは考える。)
- V—1 probation(保護観察期間)について。HenryがすぐにBonを殺さずに、probationを設けたのは、その間にBonが、ひょっとしたらNew Orleansの情婦と子供の問題に決着を付けてくれるかもしれないと思ったからだ。
- 2 このprobationは無駄に終わった。
- 3 probationが無駄に終わったのは、New Orleansで暴かれたBonの秘密に関係がある。

- VI—1 Henry と Bon は南北戦争に参加した。
 —2 Sutpen は南北戦争に参加した。
- VII—1 Mr. Compson にとって Bon の素性は、彼が New Orleans 出身であるということ以外ははっきりしていない。
 —2 Bon と Sutpen, Henry や Judith との関係は、それぞれ義理の息子、友人、結婚相手として描かれてる。
- VIII—1 Henry は Bon を殺した。
 —2 Henry が Bon を殺したのは、Bon と Judith の結婚を妨げるためである。
- IX—1 Bon は New Orleans に情婦と子供がいた。
 —2 Bon は結婚式を挙げていた。
 —3 Bon の結婚相手は octrooon だった。
- X—1 Bon の墓と死体について。
 —2 Bon から Judith への手紙について。
 —3 Ellen の墓について。
- XI—1 Sutpen は New Orleans で発見したことについてはすぐには何も言わない。
 —2 Sutpen は自ら行動を起こさず何かを待っているのだが、その理由は誰にもわからない。
- XII Bon はフランス語を話す。
- XIII Sutpen は Bon と Judith の結婚を妨げようとした。
- XIV 戦場で負傷した Bon を Henry が助けた。
- XV Bon は理由があって Henry と同じ University of Mississippi に入学した。

これらの情報の伝え方には、A. 事実として与えられるもの、B. Mr. Compson の推測として与えられるもの、C. Mr. Compson には理解できない事として与えられるもの、という3つの類型がある。

Aタイプはさらに2つのタイプ(A—1, A—2)に分けられる。

A—1：証拠。今ここに存在し、確かめられるもの。例として次の箇所を挙げることができる。

Because you [Quentin] will see the letter, not the first one he ever wrote to her but at least the first, the only one she ever showed, as your grandmother knew then.... (75)

これは、Mr. Compson が Quentin に言った言葉である。“the letter”は、Bon が Judith に宛てて出した手紙で、Quentin の祖母が Judith から託され、1909年現在も残っている。その手紙を Mr. Compson は持って来て第4章で Quentin に見せるのだ。手紙の中では、Bon の Judith に対する気持ちと戦況が伝えられており、Bon と Judith の関係、Bon が南北戦争に参加したことが裏付けられている。Quentin が実際に手で触れて確かめることのできる証拠の一つである。

A—2：Mr. Compson が話をする上で、周知の事実として、無意識に前提としていること。⁷ これらは、Mr. Compson の語りであるにも拘わらず、読者に事実であるように感じられる。例として次の箇所を挙げるができる。

...he [Bon] knew at once that Sutpen had found out about the mistress and child.... (74)

この部分は、Mr. Compson によって語られている。ここでは、“knew”や“found out”という認識を

表す動詞が使われている。この種の動詞が使われる場合、その動詞の目的語の位置にくる出来事、事柄は語り手である Mr. Compson が実際にあった出来事として前提していると言える。この引用箇所においては、“knew”という動詞を使うことによって、Sutpen が発見したという事を Mr. Compson が事実として考えていることがわかる。また、“found”という動詞を使うことで、“the mistress and child”が存在していたという事を、Mr. Compson が事実として考えていることがわかる。同じような働きをする動詞としてこの章では他に realise, discover が頻出する。

また次のように、Mr. Compson が事実として前提しているという事が示される場合がある。

...and on whose [Bon's] dead body four years later Judith was to find the photograph of the other woman and the child. (71)

この部分の語り手は、Mr. Compson である。ここでは“was to”によって、“the photograph of the other woman and the child”を Judith が4年後にやがて見つけることを、確実に約束された出来事として Mr. Compson は語っていることがわかる。

さらに副詞の働きによって、Mr. Compson が事実として前提しているという事が示される場合もある。

And Sutpen saying nothing yet about what he had learned in New Orleans but just waiting (83)

この部分は、Mr. Compson によって語られている。“yet”という副詞が、今はまだ Sutpen は自分が New Orleans で知ったことを口にしていないが、やがて、(クリスマスの前夜に) Quentin に話すことになるのは確かだということを示す働きをしている。

Bタイプは、Mr. Compson が事実であろうとかなり意識して推測していることが表れているもので、強い確信が表れていることもあれば、推測の域を出ないこともある。Aタイプより信頼度は低いですが、別の情報を提供されない限り読者は Mr. Compson の推測を受け入れてしまうだろう。このタイプはさらにB-3, B-4, B-5の3つのタイプに分けられる。

B-3: Mr. Compson の推測であることを読者が意識して受け取る情報。このタイプの物語言説にはそれが Mr. Compson の推測であることを表す指標がある。例えば、下の例がある。

...he [Henry] knew that Bon's denial would be a lie and though he could have borne Bon's lie himself, he could not have borne, for either Judith or his father to hear it. (73)

ここでは、“could have borne”, “could not have borne”という助動詞+have+過去分詞の部分が、Sutpen が Henry に言ったことが本当であるという事に Mr. Compson が確信を持つてる事を示している。この種の助動詞が指標となる例としては、他に、must (would, may) have pp. 等がある。

また、副詞が指標として使われている例もある。

...this man [Bon] miscast for the time and knowing it, accepting it for a reason obviously good enough to cause him to endure it.... (78)

ここでは、Bon が Henry の通う University of Mississippi に入学してきたことが偶然ではなく理由があったことだったという事が Mr. Compson によって推測されていて、指標として、“obviously”

という副詞が使われている。このように指標として使われる副詞としては他に *doubtless*, *certainly* 等がある。

B-4：推測を表す指標がない場合。この場合は、Mr. Compson の物語内での事実として捉えられる。Mr. Compson が語り手として信頼できる人物であると感じられる限り、他の情報源が得られない場合は、読者は Mr. Compson の物語内の事実を事実として受け取ってしまうだろう。以下の例がある。

Anyway, he [Henry] waited, hoped, for four years. That spring they returned north, into Mississippi. Bull Run had been fought and there was a company organising at the University, among the student body. Henry and Bon joined it. (94)

ここでは Mr. Compson は、“Bull Run”という歴史上の事実と共に Henry と Bon が南北戦争に参加したことを事実として語っている。

B-5：Mr. Compson が語っている物語の中の登場人物の台詞が直接話法で描かれる場合。設定上はこれらの台詞は Mr. Compson の想像で、彼自身の voice で語られている。したがって、character の直接話法による台詞が描かれている時でも、語り手である Mr. Compson の姿が完全に消えることはなく、全面的にその台詞を信用できるわけではない。しかし、登場人物の台詞を直に聴いているような状況になるため、Mr. Compson 以外からの情報提供を受けない限り、読者は登場人物の語りの中に事実が含まれているように感じるだろう。例えば下の例がある。

‘Not whores. And not whores because of us, the thousand... And where will you find whore or lady either whom you can count on to do that?’ and Henry, ‘But you married her. You married her.’: and Bon — it would be a little quicker now, sharper now, though still gentle, still patient, though still the iron, the steel — the gambler not quite yet reduced to his final trump: ‘Ah. That ceremony. I see. That’s it, then. A formula, a shibboleth meaningless as a child’s game, performed by someone created by the situation whose need it answered... you call that a marriage, when the night of a honeymoon and the casual business with a hired prostitute consists of the same suzerainty over a (temporarily) private room, the same order of removing the same clothes, the same conjunction in a single bed? Why not call that a marriage too?’ and Henry: ‘Oh I know. I know. You give me two and two and you tell me it makes five and it does make five. But there is still the marriage. Suppose I assume an obligation to a man who cannot speak my language, the obligation stated to him in his own and I agree to it: am I any the less obligated because I did not happen to know the tongue in which he accepted me in good faith? No: the more, the more.’ and Bon — the trump now, the voice gentle now: ‘Have you forgot that this woman, this child, are niggers? You, Henry Sutpen of Sutpen’s Hundred in Mississippi? You, talking of marriage, a wedding, here?’ and Henry — the despair now, the last bitter cry of irrevocable defeat: ‘Yes. I know. I know that. But it’s still there. It’s not right. Not even you doing it makes it right. Not even you.’ (91-94)

一見したところ、ここでは Henry と Bon の台詞の応酬が描かれていて、Henry が Bon の結婚にこだわっていることが明らかにされるかに見える。ところが、“and Bon”, “and Henry” というような台

詞以外の部分に示されるようにこの台詞そのものが Mr. Compson の想像である。

Cタイプは、Sutpen 家の秘密に関する情報の中、Mr. Compson にとっての謎として描かれているもの。Mr. Compson 自身が疑問に思っているが故に、読者もその問題に疑問を抱かされる。この種のタイプは1つ (C-6) しかない。例えば、次のような記述が挙げられる。

He [Bon] is the curious one to me [Mr. Compson]. He came into that isolated puritan country household almost like Sutpen himself came into Jefferson apparently complete, without background or past or childhood—... he (Bon) seems to have withdrawn into a mere spectator, passive, a little sardonic, and completely enigmatic. He seems to hover, shadowy, almost substanceless, a little behind and above all the other straightforward and logical.... (74)

ここで、“without background or past or childhood”, “completely enigmatic”, “shadowy, almost substanceless”という表現から、Bon の素性が Mr. Compson にとっては謎であるという事がわかる。

それではここで、Sutpen 家の謎に関する情報と、それが与えられるテキストでの頁、行、そしてそれぞれの情報がA-1～C-6のどのタイプに属するかを示す表を参照して欲しい。⁸

I-1	I-2	I-3	I-4	II-1	II-2	III-1	III-2	III-3	III-4
71(34-36)/2	84(18-19)/6	84(2-4)/2	73-4(36-1)/3	71(32)/2	75(29-30)/2	73(35)/2	73(33-34)/2	73(34-35)/2	72(10-15)/3
72(1-2)/2	99(28)/6	84(14)/4		73(7-8)/2		74(7)/2	79(21-22)/2	74(27-28)/2	72(24-25)/4
72(21-22)/2						83(33-34)/2	81(6-10)/2	78(34)/2	85(11-14)/2
72(31-32)/2							82(4-5)/2	79(22-25)/4	
73(30)/2								82(7-8)/2	
73(30-32)/3								82(24-25)/2	
85(7-9)/2								83(30-31)/2	
								83(33)/2	
								84(34)/2	

IV-1	IV-2	V-1	V-2	V-3	VI-1	VI-2	VII-1	VII-2	VIII-1
71(31)/4	80(9-11)/6	72(22-23)/4	72(23)/2	72(24-25)/2	85(26-27)/4	96(30)/4	74(8-25)/6	72(18-19)/4	72(31-32)/2
73(5-8)/3	80(20-31)/6	72(34-35)/2	72(33)/2	94(23-24)/2	94(33-35)/4	99(5-6)/4	77(21-22)/4	72(27)/4	79(1-2)/2
80(4-7)/3	83(12-14)/3	73(3-4)/4	77(14-15)/2		97(3-4)/4	100(13-17)/4	79(21-23)/6	72(30)/4	83(7-8)/3
87(2-4)/2	94(25-30)/3	73(11-12)/4	94(23-24)/2		98(6-10)/4		80(5)/4	74(4)/4	
87(24-26)/3		77(13-14)/3			98-9(25-2)/4		82(17-18)/4	74(6)/4	
90(19-23)/2		94(21-25)/4			102-5(26-2)/1		82(30-35)/6	75(16)/4	
93(19-20)/5					105-6(28-2)/5			77(3-6)/3	
94(11-12)/5								77(6)/4	
								77(18-19)/4	
								83(15)/4	
								83(17)/4	
								85(5)/4	
								90(33-36)/4	
								95(7-8)/4	

VIII-2	IX-1	IX-2	IX-3	X-1	X-2	X-3	XI-1	XI-2
79(17-19)/4	74(27-28)/2	75(18-19)/2	75(19-20)/4	82-3(35-1)/2	71(5)/1	100(13-17)/4	83(30-32)/4	83(32)/6
79(30-32)/3	80(3)/4	87(2-3)/2	91(5-11)/4		71(23-24)/1		84(12-13)/2	82(6)/6
79-80(35-2)/4	83(9)/2				71(27-28)/4			82(8-9)/6
	83(10)/2				75(21)/1			84(3)/6
	85(29-30)/2				75(25)/1			
	91(5-11)/4				81(1-2)/4			
	94(21-25)/2				83(27-28)/4			
					85(25)/1			
					99(1-2)/4			
					100(20)/4			
					100-1(30-21)/5			
					101-2(36-2)/1			
					102(15-26)/1			
					102-5(26-2)/1			

XII	XIII	XIV	XV
89(32-34)/4	74(15)/2	98-9(32-2)/4	78(19-21)/3
	76(20)/4		
	78(32)/4		

*表の見方 ・列 情報の内容、本文中の記号で表示
 ・行 [ページ数(行数) / 情報のタイプ] ただし情報のタイプは、
 例えばA-1のA-を省略し、数字のみで示している。

この表からどの情報を、Mr. Compsonが事実として前提しているのか、推測したものなのか、あるいは謎だと思っているのかがわかる。Mr. Compsonが事実として前提している情報は、読者も周知の事実として受け取ってしまうだろうし、推測して語っている情報も、別の異なった情報が与えられない限り、読者はおそらく事実だろうと思ってしまうことは容易に推察できる。また、この表には、Bonの素性について、Mr. Compsonが非常に限られた情報しかもっておらず疑問に思っていること、そして、SutpenがBonとJudithとの結婚を禁止し、HenryがBonを殺した理由に関する推理に対するMr. Compsonの自信が次第に揺らいでくることがはっきり表れている。Mr. Compsonのこの態度は、これらの情報に関する限り彼の推測が事実であるかどうか怪しいという印象を読者に与える。Mr. Compsonの疑問に読者の注意は喚起され、物語を読み進めるときの読者の興味の方角付けがなされることになる。

このように、読者は第4章では、Mr. Compsonによって既に述べたような情報を与えられる。その際、事実や推測として与えられるだけでなく、Mr. Compsonが抱いている疑問としても情報を与えられる。この章においては情報源はMr. Compsonだけであるから、読者が持っている情報量は、Mr. Compsonに勝るものではない。したがって、Mr. Compsonにとっての謎は、読者にとっても謎である。読者は、Mr. Compsonの前提としている事実や彼の推測を一応受け入れた上で、彼の抱い

ている疑問に関心を持つようになる。

3

Quentin の持っている情報を見てみよう。この章では、Quentin の語る部分は、ほとんどなく、彼の perspective から語られる External narrator の語りの部分は、主に彼の想像を描くことに費やされていることから、直接彼がどの程度の情報を持っているのかを示す描写はない。暗に彼の情報量を示唆しているのは、Mr. Compson が話をしているときの Quentin の様子を、External narrator が、“and meanwhile Mr. Compson’s voice speaking on while Quentin heard it without listening...”(102)と描写する場面である。ここで Quentin が Mr. Compson の話を聞き流しているのは、Mr. Compson の話に彼の知らない新しい情報が含まれていないからだと考えることができる。また続く別の箇所 External narrator は、“Quentin hearing without having to listen as he read the faint spidery script not like something impressed upon the paper by a once-living hand but like a shadow cast upon it which had resolved on the paper the instant before he looked at it and which might fade, vanish, at any instant while he still did: the dead tongue speaking after the four years and then after almost fifty more, gentle sardonic whimsical and incurably pessimistic, without date or salutation or signature...”(102)と語る。ここから Quentin は、父の話よりも、Bon が Judith に書いて送った手紙の方に興味を抱いていることがわかる。この段階で、彼は、父の知っている程度の話なら既に知っているのだから、父の推理が及ぶ程度の結論には考え及んでいない。しかしそれでは納得がいけないので、一人で考えていて、彼にとっては新しい情報を提供してくれるかもしれない Bon の Judith へ宛てた手紙に関心を抱いているのである。

特に彼は一つのことが気になっている。それは、既に一部を引用したこの章の最後の部分で、彼の想像を External narrator の voice が描いている場面に暗示されている。

(It seemed to Quentin that he could actually see them [Bon and Henry], facing one another at the gate.... the two faces calm, the voices not even raised: *Don't you pass the shadow of this post, this branch, Charles; and I am going to pass it, Henry*) “—— and then Wash Jones sitting that saddleless mule before Miss Rosa’s gate....”(105-106)

ここで Quentin は、父の話の聞きながら目下彼にとって最も気がかりなことを推測し、想像している。Quentin が想像しているのは、Sutpen 屋敷の “the gate” の前で向かい合っている Henry と Bon の様子である。Jefferson で一般的に認められた事実としては Bon は Henry によってこの the gate の前で射殺されたことになっている。この想像の場面は、Henry が Bon を射殺する直前の彼らの様子、台詞である。Quentin は、この時何が起ったのかがずっと気になっており、父の話のそっこのけでその出来事の再構築を試みている。ところが、彼の想像は、今まさに Bon が the gate を越えようとしている瞬間でとぎれてしまい、替わって Bon が殺されたことを知らせるために Rosa のもとへ駆けつけようとしている Wash Jones の Mr. Compson の voice による描写へと時間を飛び越えて移っていく。この欠落した部分、これこそが Quentin が最も関心を抱いている Sutpen 家の謎の核心部分であり、彼には、それを再構築するだけの情報がこの時点では欠けているのである。⁹ この欠落した核心部分とは、何故、どのように、Henry が Bon を殺したのかということである。この点に Quentin がこだわっているという事は、Henry による Bon の殺人の動機が Bon の重婚であるというこの時点で父 Mr. Compson が思い至った結論に彼が納得していないことを示している。Quentin は父が持つ

ている情報を既に知っているのだが、父と同じ結論には至らずに一人で殺人事件の原因を考えていることになる。¹⁰

ここで、第4章で読者に与えられた情報と第4章の時点で Quentin の持っている情報とを比較してみよう。読者は Mr. Compson によって Sutpen 家の謎に関する情報を与えられる。その際、Mr. Compson が事実として疑ってもいない情報を事実として認識し、Mr. Compson が推測している情報を一応受け入れながら、Mr. Compson の確信が次第に揺らいでくる部分、そして Mr. Compson が最初から謎としている部分に興味を引かれ、Mr. Compson と同じように疑問を持つように方向付けられる。つまり読者は、第4章では Mr. Compson の Henry の Bon 殺害事件の原因は Bon の重婚であるとする推理を暫定的に受け入れながらも、この推論が揺らぎ始める Mr. Compson と同じようにこの結論を疑い始めている。一方 Quentin は読者が Mr. Compson の話を熱心に聞いている間、Mr. Compson の持っている情報を既に把握しており Mr. Compson の推理による結論を否定し、既に Henry の別の動機を探し始めている。Quentin が持っている情報はこの章では全く明らかにされないが、少なくとも、Quentin が問題意識を抱く時間は、Mr. Compson と読者のそれより先行しており、読者は Quentin と一緒に推理の過程を歩んでいるのではないということがわかる。

結 び

第4章では、External narrator が読者と Quentin との距離を小さくするように働いているため、読者は Quentin の視点を共有する。この仕組みによって、読者は Sutpen 物語について Quentin と共に情報を収集し、推理していくかのような印象を持つかもしれない。ところが Quentin は第4章のこの時点では父から情報を収集しているのではなく、父が第4章で初めて思い至る疑問点に既に到達している、ということが、この章では、Quentin は父の言うことを聴かず一人で推理を進めていることや、この章で初めて、Henry が Bon を射殺した理由が Bon の重婚であるという Mr. Compson の確信が揺らいでくること、によって明らかになる。だから、実際は、第4章で初めて Mr. Compson と同じ疑問を持つに至った読者は、Quentin と共に推理をしているのではない。Quentin は、読者よりも一足先に Sutpen 物語の核心部分を突き止めたのである。

この章の検討から、①読者は Quentin と自分とを同一視する傾向があるのは External narrator の働きによること、一方で②読者への情報の提供者を Quentin よりも推理の過程が遅れている Mr. Compson にすることで Quentin と読者の情報に差が生まれることが、わかった。以後、この結果を踏まえて、さらに第5章以下の検討を試みていきたい。

(言語文化学科、英語文化専攻)

key words; 1. William Faulkner. 2. *Absalom, Absalom!*. 3. Narrative Technique. 4. Voice. 5. Perspective.

註)

- 1 これまで、*Absalom, Absalom!* が読者に与える特異な読書体験について言及してきた研究者は、非常に多い。それについては重迫“Ⅰ”の註6を参照。またごく最近では、Singal が、この読書体験の特異性にふれている(214—15)。
- 2 詳しくは、*Absalom, Absalom!* の第1章、第2章、第3章を取り扱った重迫“Ⅰ”、“Ⅱ”、“Ⅲ”を参照。また、voice, perspective という用語については重迫“Ⅰ”を参照。

- 3 external narrator という用語を私は、自分の語る物語の中に character としては出てこない narrator と定義して使っている。ところが、この用語は、物語論では、別の性質を持つ narrator を意味している。例えば Ruppensburg は、この用語と internal narrator という用語を対で使い、それぞれ、focal character の行動などを外側から眺めて語る narrator と、focal character の思考、感情などを内側から眺めて語る narrator という意味で使っている。物語論では、narrator が自分の語る物語の中に character として出てくるかどうかという点から narrator とそれが作る物語との関係を見る範疇と、narrator が口を開く以前に narrator として物語内に設定されているかどうかという点から narrator と第1次物語との関係を見る範疇とが考えられていて、私が external narrator と呼んでいる narrator を、heterodiegetic narrator と呼んでいる。また、特に私が External narrator と呼ぶ narrator を、物語論の用語である extradiegetic narrator という言葉を使って、自論を展開していく批評家もいる (Rimmon-Kenan, 37)。用語による混乱を避けるためには、物語論で一般的に使われる用語を踏襲した方がよかったかもしれない。しかし本稿で今の所問題としているのは、narrator とそれが作る物語との関係のみで、物語論で峻別されているその他の範疇には言及する必然性が今の所無いから、当分の間は、私の論考においては、external narrator という用語は、自分の定義している意味で使っていきたい。ただし、今後は別の用語を用いる必然性が生じるかもしれない。
- 4 William Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: Vintage Books, 1990). 以下、*Absalom, Absalom!* からの引用はすべてこのテキストにより、ページ数は引用に続けてかっこ内に示す。なお、適宜次のテキストを参照した。Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: The Modern Library, 1951) また、テキストの異同に関しては Longford の研究書を参照した。
- 5 心理的距離という用語については、重迫“Ⅲ”の註3を参照。
- 6 物語構造上の距離という用語については、重迫“Ⅲ”の註3を参照。
- 7 ここで私が周知の事実という言葉を使って表している事柄を、Bassett は、“a consensus in the community”という言葉を使って示し、Mr. Compson の話を読者が受け入れてしまう原因の一つとして挙げている (135)。
- 8 既に Cleanth Brooks は、Sutpen 家の人々について読者に与えられる情報を、Fact or Event, What Miss Rosa and General Compson Did Not Know, The More Important Conjectures made about Thomas Sutpen and His Family, の3つの項目別に整理、分類するという作業を行っており、参考になる (429—36)。
- 9 作品中 Quentin と Shreve は「Bon は黒人の血が流れる Sutpen の息子である。」という結論に達する。そこで、どのようにして Quentin はその事実を知ったのかという事が研究者の間で盛んに議論されてきた。こうした議論に対して Polk は、作品中に、それを事実として示す箇所がない以上、それが事実であるという一般に広く浸透していた前提そのものが疑わしいとして、その前提を覆し、議論の論点を見事にずらして見せた。最近では、Polk によってずらされたこの論点に対して、Singal が「Bon は黒人の血が流れる Sutpen の息子である。」事が事実である根拠を詳しく挙げる試みを行っている (201—02)。
- 10 Sutpen 物語の核心部分を narrator 達が知らないということに自論を展開するための意味を見いだして、Fowler は、“...Charles Bon represents a forbidden libidinal relation with m(other), they repress Charles Bon's meaning.”(95)と述べている。

参考文献

- Bassett, John E. *Vision and Revisions: Essays on Faulkner*. West Cornwall, CT: Locust Hill Press, 1989.
- Brooks, Cleanth. “What We Know about Thomas Sutpen and His Children” *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale University Press, 1963. 423-36.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. New York: Vintage Books, 1990.
- _____. *Absalom, Absalom!*. New York: The Modern Library, 1951.

- Fowler, Doreen. *Faulkner: The Return of the Repressed*. Charlottesville: University Press of Virginia, 1997.
- Genette, Gerard. "Discourse du recit, essai de method" *Figures* III. 1972, (花輪光・和泉涼一訳 『物語のデイスクール: 方法論の試み』水声社, 1985).
- _____. *Nouveau discours du recit*, 1983, (和泉涼一・神郡悦子訳 『物語の詩学: 続・物語のデイスクール』書肆風の薔薇, 1985).
- Longford, Gerald. *Faulkner's Revision of Absalom, Absalom!: A Collation of the Manuscript and the Published Book*. Austin: University of Texas Press, 1971.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*. Jackson: University Press of Mississippi, 1996.
- Prince, Gerald. *Narratology: The Form and Functioning of Narrative*, 1982, (遠藤健一訳 『物語論の位相: 物語の形式と機能』松柏社, 1996).
- _____. *A Dictionary of Narratology*, 1987, (遠藤健一訳 『物語論辞典』松柏社, 1997).
- Rimmon-Kenan, Shlomith. *A Glance beyond Doubt: Narration, Representation, Subjectivity*. Columbia: Ohio State University Press, 1996.
- Ruppersburg, Hugh M. *Voice and Eye in Faulkner's Fiction*. Athens: The University of Georgia Press, 1983.
- Singal, Daniel J. *William Faulkner: The Making of a Modernist*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1997.
- 重迫 和美 "Absalom, Absalom! における Faulkner の語りの技法Ⅰ" 『比治山大学現代文化学部紀要 第2号』1995.
- _____. "Absalom, Absalom! における Faulkner の語りの技法Ⅱ" 『比治山大学現代文化学部紀要 第3号』1996.
- _____. "Absalom, Absalom! における Faulkner の語りの技法Ⅲ" 『比治山大学現代文化学部紀要 第4号』1998.
- 田中 久男 『ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー』(東京: 南雲堂, 1997).

(言語文化学科 英語文化専攻)

(1998. 10. 30 受理)